



Title	中学生を対象にした絵画制作と作文による振り返り：「家族」をテーマにした実践から
Author(s)	金城, 満
Citation	琉球大学教育学部紀要 = Bulletin of Faculty of Education University of the Ryukyus(97): 17-24
Issue Date	2020-09
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/47066
Rights	

中学生を対象にした絵画制作と作文による振り返り ～「家族」をテーマにした実践から～

金城 満*

Reflections Through Painting and Essay Writing for Junior High School Students: Educational Practice on the Theme of “Family”

Mitsuru KINJO*

要約

この実践は筆者の中学校美術教師としての発見や思考を絵画制作と作文を組み合わせた、家族をテーマにしたものである。実践例は中学生美術を学校教育の教科の一つとしての範囲だけで捉えさせるのではなく、生涯を通して自己や社会を見つめ、表現するための手段と位置づけで行った。表現を介在させる事で促される美術的思考力により、「家族」を見つめさせて、「最近接発達領域」の学習理論のモデルを借りて本実践を振り返った。

キーワード：「家族」「テンペラ」「美術的思考力」「最近接発達領域」

1. はじめに（背景と動機）

この実践は、平成3年～平成6年（1991～1994）に那覇市内の二校の中学校美術で行った絵画制作と、その振り返りである作文を組み合わせたものである。本稿は、教育の振り返りをテーマに、当時の実践記録を読み返し筆者自身の目的でこの実践に至ったのかを振り返るため、2020年に再検討を行った。資料は作文以外に、作品や制作過程の写真のポジフィルムをPhotoCDに、映像教材のビデオテープをDVDに変換して全てデジタル化しておいた。そのため資料が散財、劣化せずに残せたことは幸運であった。この実践の背景と、学校教育や社会の状況1)とは無関係では無いように思う。例を挙げると、1985年にバブル経済、いじめによる自殺増加等、社会の明暗が表面化、つづいて薬物乱用増加（1987）、初任者研修制度の創設（1988）、ベルリンの壁崩壊や学習指導要領の改訂・新しい学力観（1989）、バブル経済の崩壊（1991）、学校週5日制の導入・月1回（1993）、阪神淡路大震災（1995）、またその後の1997年には不登校児童生徒10万人超や、神戸少年事件（酒鬼薔薇

事件）が起きている。

このような一種の社会的断層とも考えられる時代背景と、肉体的にも精神的にも不安定な思春期にいる彼らに私が感じたことは、内に閉じ込めた形容しがたい感情の渦である。しかも、彼ら自身その渦を直視することで、彼ら自身が巻き込まれそうな恐怖と不安に押さえつけられそうな感情をもっているようにみえた。

当時、学習指導要領改訂の動きの中で授業時数の削減もあり、少ない授業時数の中で効率的に授業を実施し、かつ魅力的に展開していける教材開発を考えていた。しかし、授業の効率化だけでは、試行錯誤から生まれる創造性を奪ってしまう危険がある。生徒が自分自身の内面と向き合い制作出来る時間の確保と、それにあった教材開発をすべきである。

しかしそれに反して、既製品で設計図通りに進めれば誰でも一定の基準に達する、いわゆる「セットもの」教材の導入を行って授業を実施している現場や、報告をいくつか目にした。例えば、亀の子タワシをハサミでカットし、ネズミ等の小動物を形取るといふものである。その結果、教師の作

* 琉球大学大学院教育学研究科

例に近い画一的な作品群が生産された。そして評価が済み作品返却後、教室のロッカーに大量に放置され、校内のごみすて場には小動物が捨てられた。それらの物は、単なる作業時間として過ごさせた、授業の進め方や教材の選び方に対する美術教育の敗北に思えた。さらにタワシとしても使用できないこれらの嘆かわしい状態に疑問を持った。原因はもちろん生徒にあるのではなく、教材そのものに魅力が無く、教師の時間に追われた授業運営によるところが大きい。様々な「セットもの」に慣らされた現代、どこでどのように作られているのかに、疑問も持たず、ただ便利との理由から消費している。美術は創造であるべきで消費ではないはずである。その様な授業からは、テーマや物とのかかわりによる思考や工夫は育ち難く、画一的な作品が多くなるのは容易に推測できる。

2. 中学校「美術」という教科の役割

美術という教科の役割は何なのか、中学3年にもなれば、現在の自分自身の状況がある程度分析でき、問題意識も持っている。しかし、「美術」を、いわゆる高校受験のための効率よく“内申点”を上げるだけのものにはさせたくない。思春期の揺れ動く時期の作品として残させたいし、家へ作品を持ち帰らせて大切にさせたい。そのためには、生徒自身と直接関わりのあるものでなければ実感が乏しく、作品に対しても愛情が持てないだろう。それが作品を放置する大きな原因であると考えた。

このことから、私は中学校美術をとおして、「表現」の意味を考えはじめた。ここでの「表現」とは、単に絵を描く、工作をするということに留まるのではなく、表現のテーマや背景そして、表現したいと突き動かされる無意識の衝動や、それらの源と結びついた行為である。行為を身体に取り込むことで、自分のもなぜそう感じるのか、なぜそうしたいのかを自問自答する。その過程を経て表現されたものが輪郭として形取られる。中学校「美術」という教科の役割は、意識化したくてもなかなか難しい内面の不安や葛藤を、作品制作という美術教育のスタイルを借りることで、間接的に自己と向き合える。そのためのより実感のあるテーマが「家族」と考えた。

3. 実践：「家族の肖像」

実践にあたり幾つかの迷いがあった。生徒達にとって家族写真を学校に持ってくることへのある種の違和感や、抵抗感が予想されたからだ。中学3年生は家族のみならず社会に対してもかなりの問題意識も持っている。家族の写真をもとに制作することは、家族写真を学校に持ってくることになり、周囲に家族の事情や、状態を知られることに抵抗を持つ生徒は出ると予想された。そこで、それら個々の家族の事情を曖昧にしつつ、テーマからは離れない意味で、家族全体である必要は無いと以下のように伝えた。

家にある家族の写真、かならず家族全体が写っているというのではなく、全体でも良いし、一部分でも良い、また自分が小さいときのものなど思いで深いものを探しましょう。また、何枚かを組合せても良いです。特に画面のどこかに装飾的なものを組合せるなどの工夫をするとテンペラ技法の色鮮やかさが効果的にできます。この様に、「弟と自分」とか「おばーちゃん」といた一部分でも良い、問題なのは家族と自分の関係が「息づいている」、そんな写真であれば全て良しとします。

(1) テーマ：「家族」

家族写真をもとにした絵画制作である。

(2) 対象：中学3年生

(3) 時間：週1時間×2学期間（13週前後）

(4) 技法：

中学校ではあまり前例の無い卵テンペラを用いた。これは卵と酢を練り合わせて接着の役目を果たすメディウムと呼ばれる糊状のものを授業開始時に作り、顔料と練って絵の具をつくる。そして、ハッチングというひたすら線を重ねていく描法で制作するというものである。この技法はルネッサンス期の絵画にも多く見られる技法であり繊細かつ色彩豊かな表現に特徴がある。テンペラの技法は、なぜ卵と顔料で絵の具が作れるのか、そもそも顔料とは何か、メディウムとは何かの原理を学び、理科学的な実験の楽しさと制作が重なり生徒たちは制作に没頭した。これらの基本事項を学習したのち、毎日授業開始時にメディウムや絵の具を作る事から、画材の大切さも理解できた。さらに、原料の共同購入により従来の中学校で使用してい

る画材より、コストも低く抑えられた。そして顔料の発色の美しさ、卵と水の性質等、制作過程での発見が思考を刺激して様々な工夫が生まれた。さらにこの技法は、耐久性もあり10年、20年と、作品の長期保存が可能である。したがって将来自らの中学時の作品を通して、今度は親の立場から家族を見つめるきっかけにもなるだろうと考えた。

(5)制作過程

家族写真をもとに鉛筆で下絵を描く(図1)。



図1 制作のようす

下絵用紙は縦横使用方法を印刷したA4サイズ。カーボン用紙で下絵を板へ写し取る。以下、制作の大まかな流れや工程を示す(表1)。

(6)評価

作品の絵画的な良し悪しだけでなく、工程ごとに細切れに評価することで努力が報われるようにした。これは絵画に対して苦手意識を持っている生徒でも制作の各ステップを楽しめるように進めた。例えば、合計が100だとすると、地塗り10、下絵10、と「描ける、上手い」だけに重点をおくのではなく作業量の多さや熱心に取り組んだ生徒に優位になるようにした。しかし、中には独創的なことをやる生徒もいて、描きながら考える「美術的思考力」を発揮した生徒には、独創点のようなものも与え、単に作業の有無だけでは評価をしていないことを告げた。

4. 作文による振り返り

二学期末に、絵画制作は終わった。その後、制作に使用した写真について、なぜこの写真を選んだのか、いつの写真なのか、その頃の家族の状況はどうだったのか、絵画制作の間何を考えたか、描くことで何か変わったか、これらを手掛かりに作文を出題した。しかし、作文を書けと言っても素直に書くとも思えず、期末テストを活用することで確実に振り返りの時間を確保する工夫を行った。一つは期末テストの内容で、第1部~第4部まで10ページある読み物で、最終ページが「問題」で絵の背景について書きなさいというもので

表1 制作工程

	大まかな実践の工程	それに沿った説明	週
導入	家族について	現在の自分とどう関わっているか	1
	テンペラについて	材料・技法説明	
下絵	ベニヤ板に布はり	実演をしながら説明→地塗り	
	家族の写真をもとに下絵描き	2回目地塗りと並行して	2
	下絵をベニヤ板へ写す	ペーパーがけ後	3
絵の具	プリントにて材料の性質など	顔料、メディウム、テクニック、価格等	
	メディウム作成	実演後、生徒の代表にさせる→黄卵の膜をつまみあげる、歓声があがる	4
中間評価	テンペラ絵の具の作り方		
	この段階でベースに差が出てくるので個人指導、中間評価などでそろえる。尚、美術室はいつでも使えるようにしておき、気軽な雰囲気をつくる		
描写法	面相筆について		
	ハッチングについて	今回は主要な技法とした→丁寧に進める	5
	種類、方法、使用箇所	順序を大切にす 一応の出発点	
	なぜホワイトだけで描くか	肉づけについて	6
	グレージング	透明色、不透明色について	7
仕上げ	部分的な質感	髪 の毛、空、影と陰	8
	この辺りからはベースも作品の傾向もかなり違いが出てくるが、無理に揃えようとはせずに、個人々々にまかせる		10
作文	「絵の背景について」		
額装	額縁作成(ガラス入り)	共同購入したフレームに作品にあわせて塗装などをす →額装することにより保存性がよくなり生活の中に絵が入る	12

ある。例として筆者自身の「家族の肖像」を掲載し、イメージしやすいようにした(図2)。2020年現在、ここに写っている人物は筆者以外、みんな亡くなった。

もう一つは期末テストという私語を発せられない空間においての作文で、自分との対話からの振り返りであり、作品の背景にあるものに注目させて内面との向き合わせによる振り返りを目的とした。

下記、例1：～例3：が期末テストでの作文である。

例1：セーターと自分（NH君）

この絵は僕が3歳か4歳のころのものです。着

ているセーターはうちの母が編んでくれたものなのですが、最初僕はそのセーターをきるのがとてもいやだったのです。それは、毛糸のセーターというのは着ると静電気がパチパチと発生してチクチクするからです。でも母は「せつかく編んだんだから着なさいよ」といっていやがる僕をおいかけまわしていました。でもしばらくたって母がセーターのことをいわなくなると、僕はむしろそのセーターがきたくなってさがしまわり、ハンガーにかかっていたそのセーターをとって、きてみました。そしたらそのセーターが気に入ってよくき

るようになりました。そしたら、母は調子によって、毛糸のチョッキから毛糸のマフラーからいろいろなものをあむようになってしまいました。そして極めつけの毛糸のパンツまでつくってしまいました。僕は絶対毛糸のパンツをはかないぞ、と思っていましたがかぜをひいたときに、毛糸のパンツをはいたらすぐ治るよ、と言われ無理やりはかされてしまいました。今でもあのチクチクした感じを覚えています。

第3部：「家族の肖像」

2学期に入り、テンペラという初めての技法で「家族の肖像」をやっているわけですがもうすぐ完成へと大詰を向かえ、この段階でもう一度、家族について考えてみましょう。

今はおそらく絵をどのように仕上げようか、色はどうしようか、などなど画面のほうへ気がついていっていると思います。

そういったテクニックはとても大切だし、絵づくりには不可欠です。それにもう一つ加えて欲しいのが「絵の背景にあるもの」です。簡単に言うと、絵を描きながらこの時の家族はどんな家族だったのかなー、この頃の自分はどんな感じだったのかなー、一枚の写真をもとにして描いた絵にはさまざまなものが入っているはず。それを表現しなければ、炭酸の抜けたコーラです。

一つの例として右下の写真を見てください。これは昭和6年に撮られた写真でボクの母方の家族です。真ん中に立っている女の子が、ボクの母で、りょうわきがオジー、オバーです。撮影はオジーのカメラでセルフで撮ったものです。この時代にそういうことが出来たのはお金持ちだったからだとも思いますが、お金の話にはお金の話でなくオバーの話によると明日食べる物がなくてもオジーはおかまいなくお金を写真に注込んでいたようです。だからオバーの苦労は大変なものだったようです。その苦労のおかげで母親の小さい頃からの写真を見ることが出来き胸が熱くなるのです。あの時代においてこれだけ写真があるのは希なこと。しかし、戦争が始まったころから写真が撮られなくなるのです。

そのオジーは4年前に亡くなり、オバーは現在86歳、母はもうすぐ65歳です。



この子は左か
でしよう
ヒト: 昭和38-9年
この写真で
右手には棒と持
いアタマで



図2 筆者自身の「家族の肖像」を掲載

例2：タイトルなし（AKさん）

この絵は、私といとこと弟、妹の写真で、3年前くらいのものです。みんな小学生だけど、今は中学生になっています。このころが一番楽しかったような気がします。昔は仲が良くて家にも泊まっていたとこたちですが、最近は全然ありません。私は中3で受験生、いとこたちも中学生になった今、勉強が優先、部活が優先で、なかなかあえません。むかしはよく、祖母の家に集まったけど、最近は、全然集まらないし、時々集まっても顔を出して帰ると言う感じで前とは全然ちがいます。日曜日にはいろいろなところへ行ったりしたのに今は、何を話したらいいのかわからないぐらいに、遠い存在になって塾だ塾だとやる必要があるのかなぁと思います。その答えはまだでてないけど、答えが出る時はもう手おくれになっているんじゃないかと、不安な気持ちです。

例3：この写真の時を思い出して（SG君）

この写真は、ぼくが3さいの時うつしたものです。となりにいるのが、にーにーです。このころににーにーには、10さいでした。今では、結婚しようとしているところです。この写真は、おやじがおふくろとおれたち二人をつれて、海に行ったときだと、おふくろからきいた。この写真の背景は全部海だ。とてもきれいな海だ。今ではもうこの海は無い。ぼくたちが写真にうつってる場所もない。みんな、アパートとか、うめたてちとかでなくなった。おやじとおふくろはもう離婚して、他人になっちゃった。今、おれはおふくろと二人ですんでいる。おやじは本土で仕事をしている。にーにーは、こんやく者の家のベッドの上にいる。家族がいっしょにうつっている写真は1枚もない。でも、この写真を見ていると、あのころが今よりずっと良かったなぁと、見るたびに思う。

5. 文集の編集と校内展

最初の文集は1992年松島中版である。当時、期末テスト後誰一人生徒は反応せず、筆者の期待を大きく裏切られたように思った。ところが、テスト監督をしていた同僚から、回収後読み出したら止まらなかつたことを告げられ、私も慌てて読み始めた。生徒の日常の表情とは裏腹に、繊細な

文章が綴られていた。やはりこの年齢には難しいテーマで、無反応なのは仕方がないと思ってあきらめていたことが崩された。文集を作るきっかけはこのような経緯と、生徒たちの家族や社会に対しての真直な眼差しである。不適切な言葉もあり正直少し抵抗もあるが、当時の筆者の前置きをそのまま掲載する。

はじめに

「先生、何でこんなのツクツタの」

期末テストでの君たちの「家族の肖像」の作文を読み、・・・ボクは毎日反省の日々を送っています。それは、君たちがあまりにもみずみずしく、デリケートな感性を持っていることに気づかされたからです。はじめ、あの問題を作ったとき君たちが本当に反応してくれるのか不安でした。（ボク一人浮いてしまうのではと）それがなんと、もう泣きたくなるほどやさしい、君たちの作文につつまれています。そんな君たちにボクは「バカタレヒャー！」とか「ゲレンカー！」とか「フラーかおまえは！」などといつも悪い言葉をあびせてることを反省しているのです。そのザンゲの気持ちからコレを編集しました。それにこの作文たちを独り占めするのではなく、君たちにも読んで他の人の今の感じ方、考え方にも触れてほしかったからです。残念ながら全員のを載せられないので、いろんな面から33人にしぼりました。テンペラの「家族の肖像」と同じように10年、20年という時間の単位で考え、大切に保管していて欲しいと思います。1990年12月風日松島中の美術の先生

照れ隠しにも似た、生徒の成長に直面した時の驚きと、投げかけておいて還ってきたものへ対する責任の取り方への手段の無さである。

文集はプライバシー問題もあり、掲載の承諾は欠かせない。実名、匿名で作文の掲載に協力してくれた生徒達、持ち帰った文集に対して反応を下さったご父母の皆様へ感謝を伝えた。筆者自身この実践では、中学生の外観の空々しさからは計り



図3 那覇中版表紙

知れない、内面の繊細さに凜とさせられ、教育の方法のヒントを与えられた気がした。同時に美術教師として、生徒の成長に立ち会える喜びを実感出来たはじめての出来事であったと記憶している。この「家族の肖像」の特徴は、その年の文集を編集して配布する点である。それにより保護者から思わぬ手紙をいただいたり、家族で仏壇に供えたりというまで出てきた。また、絵画と作文の両方を並べた「家族の肖像」展を校内で開催し、学校全体での振り返りの機会とした。

6. 映像教材としての拡張

実践3年目、文集1994年那覇中版(図3)に加え、新たに、二部構成の映像教材を作成した。



図4 描法の解説映像

「第一部テンペラのテクニック編」(図4)では絵の具の物質面の理解と絵画技術の向上をテーマに、8分程度の映像に編集した。「第二部ハート編」では絵がもつ背景の作文を制作絵画のライドショー(図5)をバックに生徒によるナレーションとBGMを重ねた8分16秒の映像である。こ



図5 テンペラによる「家族の肖像」

の様な映像教材を加えることで、感情に訴えることをねらいとした。ナレーションで使用したのが4.例1～例3の三点の作文である。

完成した映像を授業での鑑賞時に、担任にも生徒と一緒に見ていただいた。後日、その学級通信には、担任自身の「父と娘」の関係が綴られており、生徒の作文につづけて文集に掲載させていただいた(図6)。その中から二カ所引用させていただく。“このビデオを見てボロボロに涙を流した”、“私が嫁にいくとき父は、「娘をよろしく」いかとおもうと・・・涙がとまらなく流れてくる。”

これは映像教材を媒体にして、美術の教科を超えて学年全体へと広がった。直接的には物言わぬ生徒たちに対して、多様な感情や大人に対する見方があることへの、教師の理解へとつながった例と言えるのではないだろうか。

筆者自身、1990年代に行ったこの実践を2020年に見直し、振り返り発見したことがある。目標、または方向性である「自分と家族の関わり」から「社会と自分の関わり」にまで生徒たちは学んでいた点である。そして「生活と美術の関わり」等も決して中学生にはまだ早いとか、難し過ぎるとかではなく、年令に応じた感じ方があるはずで

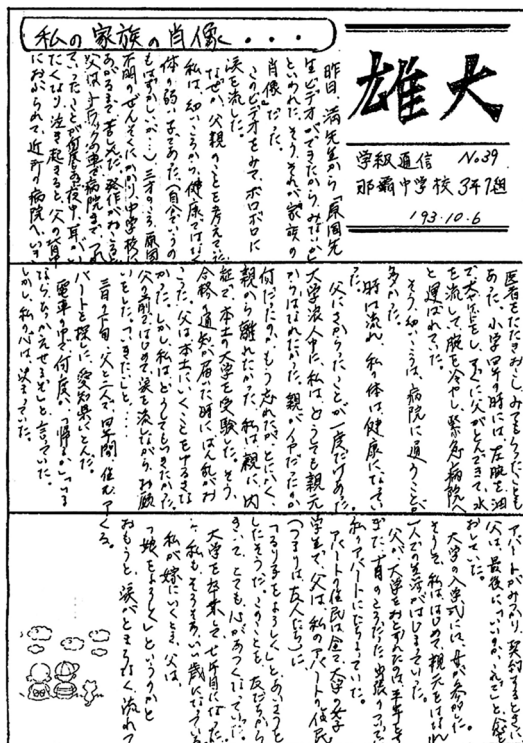


図6 当時の学級担任、原国るり子先生の学級通信

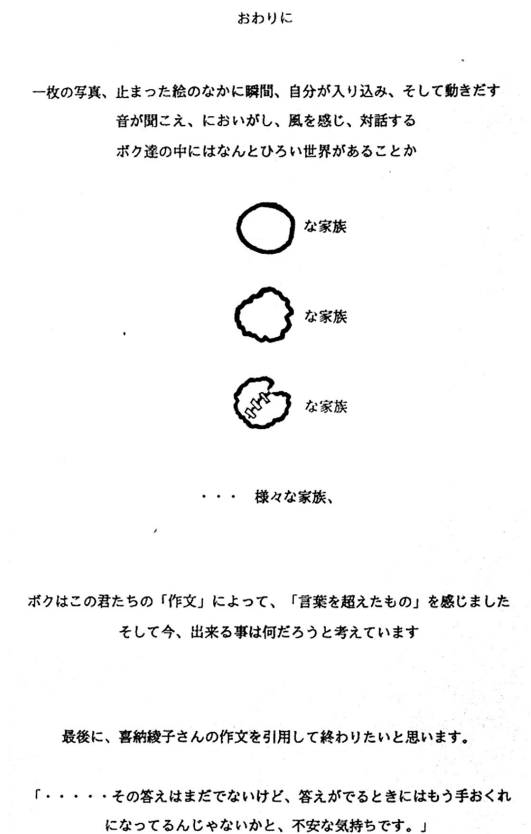


図7 文集と映像で使用したフリップ

ある。特に中学3年生には学校で学ぶ最後の「美術」の人も多いのでと考え、実生活の中にか残せるような授業や教材の必要性を感じていた。また、文集と映像のラストで使用したフリップ(図7)を掲載する。これは、文章と図示が交互に出てくることで、より、鮮明に「家族の肖像」の主題を伝えることを意図したものである。

7. 振り返りのまとめ

「家族の肖像」は家族を題材にしてハッチングと言う同じ動作の描法の積み重ねで作品ができていくというやり方なので、一見無駄な時間のように思えるが、黙々と家族について何か深く自分との対話を経験する。しかし、そこでどう深く対話したかがわからないといけなないので、作文という形で自分の心の中の変化や自分の思いを表してもらい、可能なレベルで共有することによってお互いをよく理解する。また自分自身をも理解することにつながることから、この絵画制作と作文を繋げた実践を行った。

中学校になると憶えないといけなことがたくさんあり、学校でもいろんな知識を憶える、塾に行っても知識を憶える、家に帰ったらテレビからいろんな情報が洪水のように一方的に入ってくる。そんな中で、なかなか自分で深く対話する、考えるという時間が取れない。人との会話も大事だけど自分との対話も大事で、これを軽視しすぎると深い学びに繋がらないのではと考える。また、教師がただ生徒に対してお互い話し合ひましよう、と、生徒任せでもダメで、そこには教師の深い意図があり、そこに到達してもらいたいから対話をさせていることを伝える必要があるだろう。

教育を支える学習理論としてロシアの心理学者レフ・ヴィゴツキーが提唱した「最近接発達領域 Zone of Proximal Development (以下、ZPD)」²⁾がある。また、「発達の最近接領域」と呼ばれることもあるが、本実践を振り返るためのモデルとして、ZPDを参考に「家族の肖像」による生徒の学習の領域を私なりに図示した(図8)。
①ひとりのできる領域(発達領域)と、②仲間や支援があればできる領域(潜在的発達領域)、③ZPDが様々な刺激や周りの支援を受けて新たに出来る伸びしろの部分である。生徒が現状において、ひとりではできない事柄に対して③を具体的に述べると、「生徒の学びの環境を整える」「一緒に学ぶ仲間からの新たな技法や興味づけ」、「教師の勇気づけ、デモンストレーション、明確な指導」、そして、持ち帰った文集に対する「保護者の反応や生徒への賞賛や支援」等、様々な足場による働きかけが効果的だろう。

このようにZPDは、人的・物的媒介物を積極

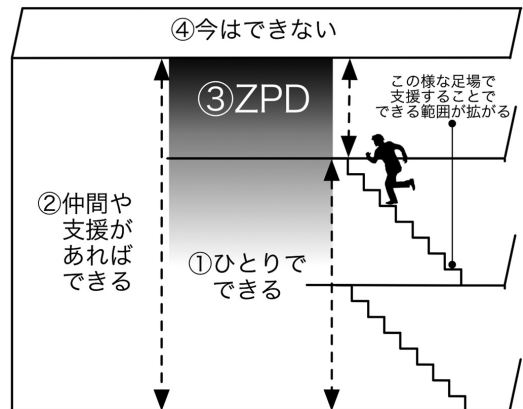


図8 「家族の肖像」による生徒の学習の領域

的に活用しながら、やがて「仲間や支援があればできる」から「ひとりでできる」領域を拡大させる、参加型の教育方法といえるだろう。したがって、現状では多少難しいと思われる課題に取り組みさせることで、生徒の試行錯誤を刺激し、「④今はできない」次のステージへと挑戦させられると考える。

また文集の配布や、映像教材は、単に、教科としての美術に関する知識技能の習得だけを目的にしたのではない。今後、あらゆる教科領域や社会教育分野と関係付け、総合的に学び続ける態度をふまえた「生きかたの基本」や「美術的思考

力」を柱に、生徒の学習の領域を広げるための教育方法の開発を行いたい。

文献

- 1) 文部科学省(2009)「生徒指導関係略年表について」(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121504.htm;2020年5月1日閲覧).
- 2) ヴィゴツキー, L.S. (2003) 土井捷三・神谷 栄司訳『発達の最近接領域』の理論—教授・学習過程における子どもの発達—, 三学出版.